

丹後郷土資料館調査だより

平成 31 年 3 月 26 日 第 8 号

ごあいさつ

丹後郷土資料館は、昭和 45 年 11 月の開館以来、京都府北部における古代から近代の歴史・考古・民俗資料などの収集・保存、調査・研究、展示及び教育支援活動に取り組んでまいりました。これも、府民の皆様方から賜ってまいりました御支援があつてこそと、厚く御礼申し上げます。

当資料館は、平成 30 年度も「海の京都」の歴史と文化の拠点施設として、企画展や特別展、丹後学び舎セミナーなどの事業を展開し、丹後の歴史と文化の学びの場となるように努めてまいりました。

また、昨年度に京都府にいただいた寄附金で購入した丹後にまつわる古文書などの資料 28 件 49 点を、特別陳列「寄附購入史料展」と企画展「ふるさとミュージアムコレクション」で展示し、府民の皆様方に御紹介させていただくことができました。

当資料館では、これからも皆様から寄附・寄託いただいた資料を調査・研究に生かし、丹後の歴史や文化を後世に伝えることができればと思っています。

今後も、地域に根ざした資料館を目指して、魅力ある展示や事業を一層推進してまいりますので、当資料館への御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げます。

京都府立丹後郷土資料館長 山岸 浩

目 次

■ ごあいさつ	館長 山岸 浩	1
■ 環境・住まい方・土器の姿	森島康雄	2
■ 丹波の算法少女	青江智洋	8
■ 「一色軍記」の成立過程	吉野健一	14
■ 平成 30 年度の資料整理	資料課	20
■ 丹後学び舎セミナー活動報告	資料課	22
■ 平成 30 年度のあゆみ	総務課	24

環境・住まい方・土器の姿 ～企画展「地球環境と縄文文化」から～

資料課 森島康雄

はじめに

今年度の企画展は「地球環境と縄文文化」というかなり壮大なタイトルで実施した。

環境の変化に伴う動植物の変化が、土器や石器に、さらには、人々の意識にどのような変化をもたらしたのかという切り口で、丹後の縄文時代の遺物を展示し、地球環境と縄文文化を考えた。

展示した資料は丹後地域の縄文時代の遺物であるが、福井県安全環境部自然環境課から提供を受けた水月湖年縞堆積物のボーリングコア約20,000年分の写真パネルが壁の上部を取り巻く展示室も来館者の目を引いたようで、地球環境との関係で考古資料を見たことが無かったという観覧者の声も聞かれた。

本稿では、縄文時代前期に焦点を当て、環境の変化と人々の住まい方や土器の姿との間にどのような関係を見出せるのか考えてみたい。



第1図 企画展「地球環境と縄文文化」チラシ

1. 縄文時代の環境変化

縄文時代の環境は、グリーンランド氷床コアの酸素同位体比変動から推定される気温変動や、陸上・海底の各地層から発見される化石の分布から推定される海水準変動などによって復元されている。

縄文時代が始まった約16,000年前は、最終氷期で、地球の気温は現在よりも10℃ほど低く、海水面は100m以上低かったことがわかっている。

約14,600年前、急激な温暖化が起こるものの、約12,800年前～11,600年前にヤンガー・ドリアス期と呼ばれる寒の戻りの時期があるなど、最終氷期の終わり頃は、気候が激変する不安定な時代であった。

約11,600年前、ヤンガー・ドリアス期が終わるとともに最終氷期が終わり、間氷期が始まった。この変化は水月湖の年縞堆積物に肉眼で確認できるほどの明瞭な境目として現れることから、ある年を境に急激に起こった変化と考えられる。草創期が終わり、早期に入るのがこの時期である。

早期には気温や海水面の急激な上昇が続き、約7,300年前に始まる前期には安定する。温暖化のピークは前期に納まる約7,000～6,000年前頃で、現在より気温が2～3℃、海水面が4～5mほど高くなる。

約5,500年前に始まる中期も温暖な気候が続くが、中期の終わり頃から後期にかけて気候がやや冷涼化する。

したがって、縄文時代前期は、気温が現在と同じかやや高い、温暖で安定した時代であった。



第2図 企画展「地球環境と縄文文化」の一齣

2. 丹後の縄文時代前期の土器

ここでは、縄文時代前期の良好な資料が出土している舞鶴市志高遺跡と京丹後市松ヶ崎遺跡の資料をもとに、丹後における縄文時代前期の土器の変遷をまとめてみたい。

1・2は前期初頭の九州の^{とどろき}轟 B 式土器群の影響を受けた土器である。轟 B 式土器は、熊本県轟遺跡を標識とする縄文時代前期初頭の土器で、外面に刻み目を持つ低い粘土帯を貼付けることを特徴としている。近年の研究では約7,300年前に降下した鬼界アカホヤ火山灰層の上で出土し、その分布範囲は九州全域から山陽・山陰・四国から韓半島南岸部におよぶことがわかっており、火山の噴火災害を逃れて九州中部から移動した人々が伝えた土器型式と考えられる。

1は頸部で屈曲する深鉢である。内外面を条痕で調整し、口縁端部外面に粘土帯を貼付け、胴部には水平に巡る1条の刻み目粘土帯から下方に向けて縦方向の粘土帯を6条貼付け、縦突帯間には横方向の沈線を施している。底部は丸底である。志高遺跡から出土した。2は胴部で屈曲する深鉢である。口縁端部から下方に向かって貼付けた短い縦方向の粘土帯の下端に水平方向の粘土帯が巡り、さらに下にもう1条の粘土帯が水平に巡る。底部は失われているが丸底と推定される。京丹後市松ヶ崎遺跡から出土した。

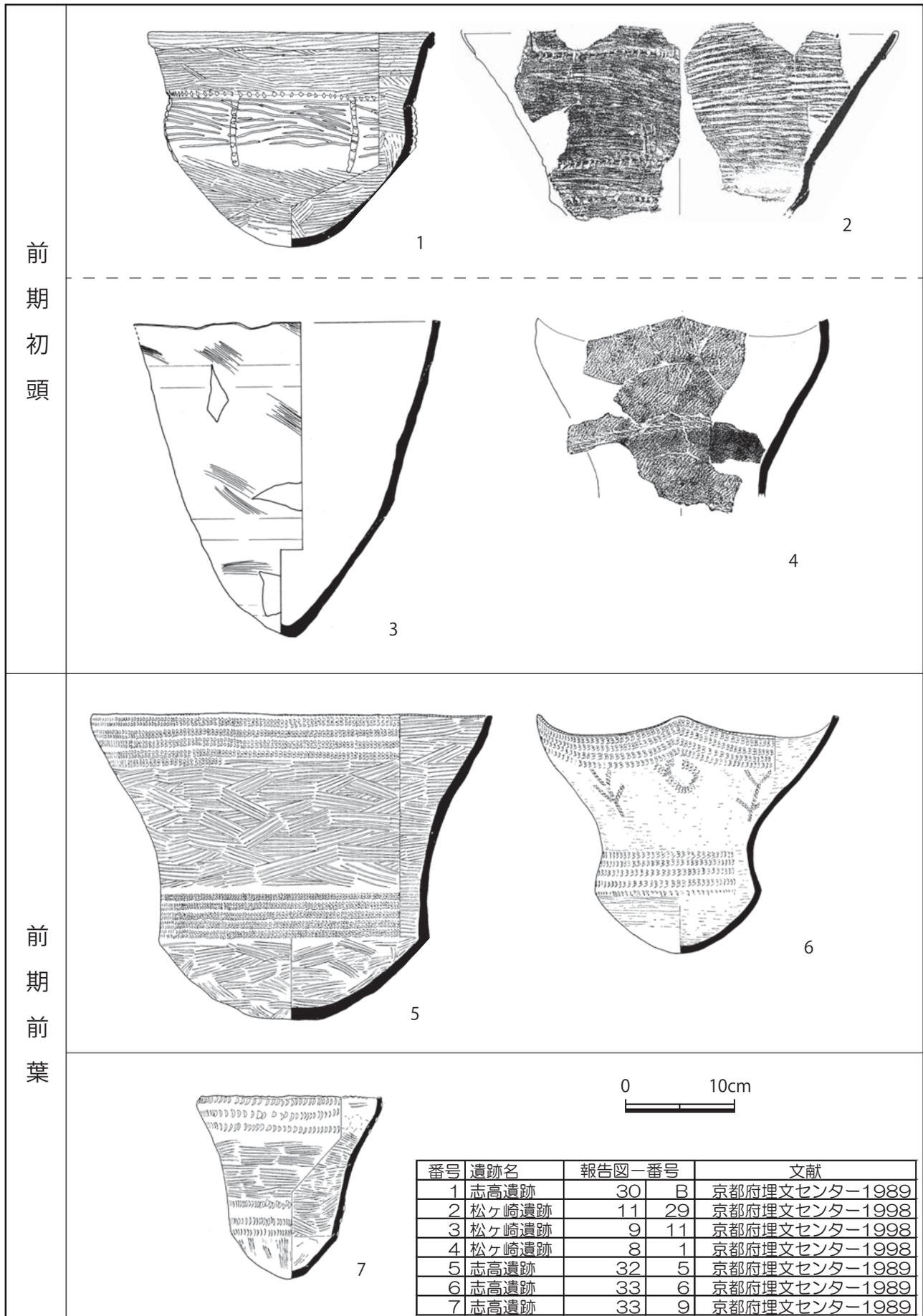
3・4は松ヶ崎遺跡から出土した前期初頭の土器である。3は水平口縁で砲弾形の単純な器形の深鉢で、外面は条痕調整の後、ナデ調整を施し、内面はナデ調整を施す。装飾性のほとんどない土器であるが、口縁の上端面にのみ刺突文を巡らせている。4は波状口縁で胴部が屈曲したいわゆるキャリパー形土器で、外面は縄文、内面はナデ調整を施し、胴の屈曲部には2条の押引文を水平に巡らせる。底部は失われているが、小さな丸底と推定される。

5～7は舞鶴市志高遺跡から出土した前期前葉の深鉢である。5は水平口縁のキャリパー形の器形で、内外面を条痕文で調整し、口縁部下と屈曲部上に「3」字状の刺突文をそれぞれ4条、水平に巡らせる。口縁上端面にも刺突文を施す。底部

は丸底である。6は波状口縁のキャリパー形土器で、内外面に条痕調整を施す。口縁部下に3条の「3」字状の刺突文を口縁部のカーブに沿って、屈曲部上には5条の「3」字状の刺突文を水平に巡らせる。口縁部文様帯の下には、波頂部に対応する位置に弧状の、波底部に対応する位置には樹状の「3」字状の刺突文を付加する。口縁上端面にも刺突文を巡らせる。底部は丸底である。7は水平口縁の小型深鉢である。内外面は条痕調整で、口縁部下と屈曲部上に「D」字形の刺突文をそれぞれ3条水平に巡らせる。口縁上端面にも「D」字形の刺突文を巡らせる。底部は尖り気味の丸底である。これらのうち、5・6は羽島下層II式、7はやや下る北白川下層Ia式に比定される。

8～10は志高遺跡から出土した前期中葉の平底の深鉢である。8は水平口縁の深鉢で、口縁部から胴部の屈曲部にかけて5条の「C」字形の刺突文を水平に巡らせ、その下の屈曲部には滴形の刺突文を水平に1条巡らせる。9は4か所に波頂を持つと考えられる波状口縁の小型鉢で、内外面に条痕調整を施す。口縁部の下には5条の「C」字形刺突文を口縁部のカーブに沿って施し、わずかな屈曲部にやや間隔の開いた「C」字形刺突文を1条水平に巡らせ、胴部下半にも5条の「C」字形刺突文を巡らせる。「C」字形刺突文は、口縁部内面にも波状口縁に沿って1条巡らせている。10は4か所の波頂を持つ波状口縁の小型鉢で、波頂部には内側に突起が付けられている。内外面に条痕調整を施す。文様は口縁部下と屈曲部と胴部下端に分かれる。前2者は半截竹管によるとみられる2条単位の平行沈線に挟まれた「C」字形刺突文からなる文様帯で、口縁部下は口縁部のカーブに沿って、屈曲部は水平に巡る。口縁部下の文様帯と屈曲部の文様帯の間は、4か所の波頂部に対応する位置に縦方向の「C」字形刺突文を施して連結している。底部の文様帯は逆に2条の「C」字形刺突文が半截竹管によるとみられる2条単位の平行沈線を挟んでいる。これらのうち、8・9は北白川下層IIa式に、10は北白川下層IIb式に比定される。

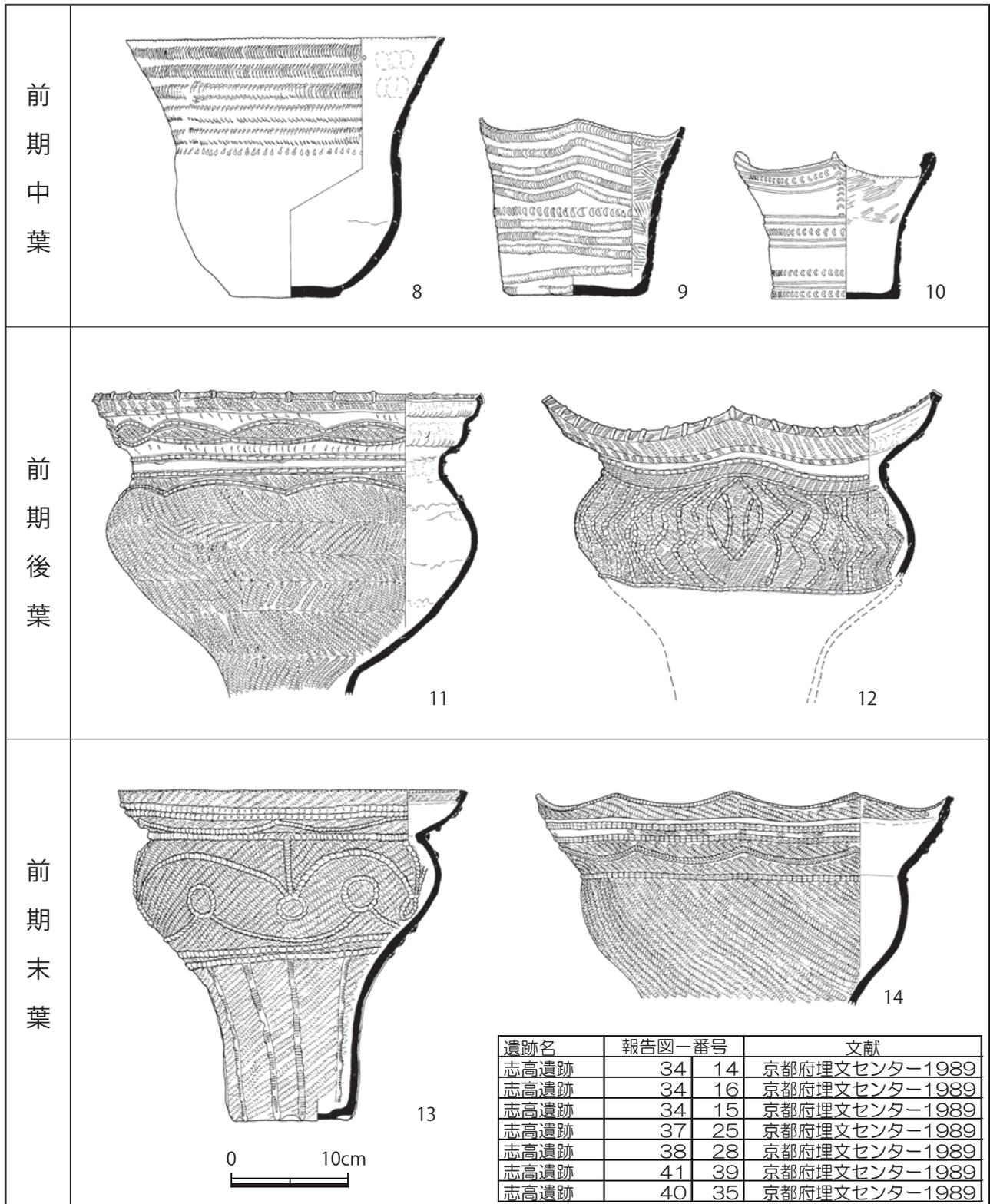
11・12は志高遺跡から出土した前期後葉の深



第 3 図 丹後地域の縄文時代前期の土器

鉢である。11は水平口縁で2段に広がる口縁部と胴の張る体部を持つ。口縁部は縄文を施した上に、端部外面には短い粘土帯を縦方向に貼付け、口縁部下段には波状に巡る2条の特殊突帯文で構成されるレンズ状の区画を12単位作り出し、その上下には爪形文を巡らせる。頸部は平行する2条の特殊突帯文が巡り、胴部は全面を羽状縄文で

埋めている。胴部の最上部付近には1条の特殊突帯文が波状に巡る。12は4か所に波頂を持つ波状口縁で上部から見ると方形を呈する。肥厚した口縁端部外面には短い粘土帯を縦方向に貼付け、頸部から胴部上端には3条の特殊突帯文が波状に巡る。胴部は羽状縄文の上に縦方向を基調とした屈曲する特殊突帯で文様を構成する。波頂部に対



第 4 図 丹後地域の縄文時代前期の土器

応する位置に付けられた紡垂形と弧形を組合わせた特殊突帯文と、波底部に対応する位置に付けられた鎖状の特殊突帯文との間を、弓形に屈曲した特殊突帯文を対称形に4条ずつ貼付けて埋めている。これらは、北白川下層Ⅲ式に比定される。

13・14は志高遺跡から出土した前期末葉の深鉢である。13は水平口縁でキャリパー形の深鉢で、全面にLRの縄文を施している。内湾する口縁部は、内端部に粘土帯を貼付け、内外から「Σ」字形刺突文を施している。口縁部には3条の粘土帯が巡るが、上の2条は水平に、下の1条は波状に巡る。胴部上半は胴部最大径のやや下に位置する円形の粘土帯を上向きと下向きの連弧形の粘土帯でそれぞれひとつ飛ばしに繋ぎ、胴部下半とは水平方向に巡る2条の粘土帯で画される。これらの粘土帯にも「Σ」字形刺突文を施している。胴部下半は縦方向の12条の粘土帯を底部との境まで貼り、粘土帯間のひとつ飛ばしに6か所の底部外周に二枚貝を押圧する。縦方向の粘土帯にも二枚貝の押圧文を施す。14は8か所の波頂部を持つ波状口縁の深鉢である。口縁端部内面と外面の全体にRLの縄文を施す。粘土帯を貼付けて肥厚した口縁端面に「Σ」字形刺突文を施し、口縁部に2条、頸部に1条水平に巡る粘土帯には刻み目を施す。口縁部下半には8連の弧状の粘土帯を1条貼付け、上面には「Σ」字形刺突文を施す。これらは、大歳山式に比定される。

3. 平底から丸底へ

これらの土器を見ると、第3図に示したものは丸底や尖り底、第4図に示したものは平底であることに気づく。口縁部が水平であるか波状であるかによらず、前期前葉と前期中葉との間に土器は丸底から平底に変わる。

我々現代人の目から見れば、丸底や尖り底の土器は不安定極まりないように感じられるが、これは、我々が平らな床での生活に慣れているゆえに生じる感覚である。自然の野山で暮らす人々からすれば、支点が3つあれば立てられる丸底や尖り底の土器は、石や根の隙間を見つけて、あるいは小さな穴を掘って底を差し込めば立てることがで

きる便利な形であり、平らで大きな底面を持つ土器は、かえって不便極まりないものであった。

実際に志高遺跡で竪穴式住居跡と考えられる遺構が確認されるのは前期中葉からである。土器の平底化と定住化が同時期に起こっていると考えられることができるだろう。

一般に、人々は定住すると平底の土器を持つようになることが多い。例えば、温暖な気候に恵まれて縄文時代早期の早い時期から定住集落が形成されていた鹿児島県の上野原遺跡などでは、円筒形や角筒形をした貝殻文系土器や塞ノ^せ神式^{かん}土器と呼ばれる平底の土器が使われていた。ところが、早期と前期の境目にあたる約7,300年前に鹿児島南方の海底火山が大噴火し、噴出した幸屋火砕流や鬼界アカホヤ火山灰で南九州の遺跡が壊滅する。いったん断絶した南九州の遺跡に再び戻って来た人々が携えていた縄文土器は丸底の轟B式土器である。

縄文時代前期は約7,300年前から約5,500年前までの1,800年ほどの期間であるが、この時期は縄文時代の中でもっとも温暖な時期にあたる。

早期から進行した温暖化によって海水面は上昇し、氷期の平野は水没して大陸棚という豊かな海になった。山地には落葉広葉樹林、さらには常緑広葉樹からなる照葉樹林が広がってきた。温暖化によって周辺の生物資源の総量が増えたことで、人々は、海や大きな川に面し、背後にドングリの森が広がる場所に定住するようになった。この時期の丹後を代表する縄文遺跡である松ヶ崎遺跡・志高遺跡・舞鶴市浦入遺跡のいずれもが、日本海の内湾沿岸や大河川のそばの上記の条件を満たす場所に営まれているのは偶然ではないだろう。もはや、食料を探して移動を繰り返す必要がなくなったことが定住化をもたらしたと考えられる。

4. 複雑化する土器の文様

第3・4図をみてもうひとつ気付くことは、時代とともに土器に付けられる文様が複雑化することである。前期初頭には、すでに定住していた九州の影響を受けた土器を除けば、ほとんど装飾性を持たなかった土器が、前期前葉には口縁部下と

屈曲部上に刺突文の文様帯を持ち、平底になる前期中葉には底部付近にまで文様を施すようになり、前期後葉には全面に縄文を施して幾何学模様の粘土帯を貼付けるようになる。

この変化はどのように説明できるであろうか。ひとつには、温暖化によって食料が安定的に獲得できるようになったことから、土器づくりにより手間隙を掛けられるようになったことが挙げられるであろう。そして、定住によって、土器づくりの技術が安定的に次の世代に伝えられるようになったことで、技術の継承とともに新たな工夫が加えられて文様が複雑化すると考えられる。

多くの人が生まれた地域で一生を過ごす社会では地域の文化が安定的に継承され、継承の過程で少しずつ新たな工夫が加えられて複雑化し、地域の独自性が生まれていく。縄文時代前期はまさにこのような時代であったと考えられる。

一方、ほとんどの人が生まれた地域から他の地域へ移動する社会では地域文化の継承は不安定になり、地域を超えた共通性が生まれる。地域の祭りなどの伝統文化が維持できなくなり、文化の画一化が進む現代社会はこのような時代と言えるだろう。

おわりに

本稿では、丹後の縄文時代前期の土器変遷を概観し、定住とともに土器が平底化し、安定した定住社会が続くことで文様が複雑化することを示した。これらは特に目新しいものではないが、「はじめに」に記した、「地球環境との関係で考古資料を見たことが無かった」という観覧者の声にも現れているように、その変化をもたらす力として温暖化という環境変化を積極的に評価した例はほとんどなかった。

その背景には、環境の変化が歴史を動かす要因となったことを、考古学や歴史学が過小評価してきた歴史がある。社会の発展は、その社会がもつ物質的条件や生産力の発展に応じて引き起こされると考える史的唯物論が理論的支柱の一つとして大きな影響力を持ってきた戦後の日本歴史学においては、歴史を動かす要因は階級闘争であり、気

候変動が歴史に大きな影響を及ぼすという考え方は、環境決定論として排除されてきた。環境決定論は地理学の概念であるが、同じ自然条件のもとでは同じ人間活動が行われるとする考え方であって、史的唯物論とは相容れないものであった。

しかしながら、頻発する異常気象や自然災害から地球環境の変化への関心が高まり、経済の停滞から社会が発展の方向にのみ動くものではないことが広く認識されてきた1990年頃から、環境の変化が歴史に与えた影響への関心が高まって来た。

近年では、水月湖の年縞堆積物中の花粉分析や樹木年輪の酸素同位体比によって復元される気候変動と遺跡の消長や飢饉・戦乱などの記録との関係といった視点での研究が盛んになっているものの、未だ、考古学や歴史学の環境決定論への嫌悪感根強いと感じることが多い。一方で、史的唯物論への過剰な嫌悪感を示す著作も見られる。

史的唯物論が環境を過小評価した尊大な見方であるとすれば、環境決定論は人間を過小評価した卑屈な見方であろう。問題は二者択一で解けるものではない。

人間も地球上で暮らす生物である以上、環境の影響を受けざるを得ないことは間違いない。しかし、人間は環境の変化に翻弄され続けていたわけではなく、知恵と道具によって局所的には環境を変えるような働きかけも行いながら、その行動が良い結果をもたらしたかどうかは別として、最善と考える行動をとって来たはずである。

とすれば、考古学や歴史学に求められるのは、自然科学を含めたあらゆる資料を使って、歴史を多角的に叙述することではないだろうか。

参考文献

- ・戸原和人ほか1998「松ヶ崎遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第82冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)
- ・中川毅2017『人類と気候の10万年史』(講談社)
- ・松木武彦2007『列島創世記』全集日本の歴史第1巻(小学館)
- ・三好博喜ほか1989『志高遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第12冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)

丹波の算法少女

—佐藤小夜女のストーリーと彼女のユニークピース—

資料課 青江智洋

はじめに

わたしたちが学校や塾でまなぶ数学(算数)は、その大部分が明治時代に西洋から輸入した知識に基づいている。それとは異なり、江戸時代に独自の発展を遂げて人びとの暮らしに根づき、文化やたしなみとしても親しまれた数学がある。それは近代になって洋算(西洋数学)と区別され、和算と呼ばれるようになった。

当館では、平成30年度企画展として「丹波の算法少女—楽しみながら学ぶ和算と算額—」を開催した。本展では、和算独特の文化である算額奉納・遺題継承・遊歴算家を取り上げて和算の魅力に迫るとともに、「はかる道具」を展示して和算に親しむ上で要となる尺貫法の単位をわかりやすく説明することに努めた。また、数学の絵馬として知られる算額については、丹波・丹後地域に伝わる4点を一堂で紹介した。そのうち福知山市夜久野町額田の妙龍寺が有する算額に佐藤小夜女という13歳の少女が和算の問題を掲げていることに着目し、彼女を「丹波の算法少女」と位置付けてその功績を顕彰した。

本稿では、企画展の中で十分に紹介することができなかった佐藤小夜女の足跡をたどるとともに、彼女が遺したユニークピース(Unique Piece/世界に1つだけの作品)の新たな価値と可能性を探りたい。



企画展「丹波の算法少女」チラシ

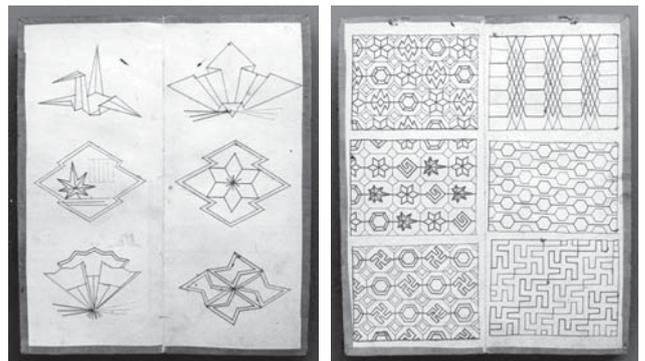
1 算法少女 -佐藤小夜女のストーリー-

タイトルに冠した「算法少女」は、安永4年(1775)に刊行された和算書『算法少女』に因むものである。本書は、壺中隠者こと撰津国出身の医師千葉桃三が手ほどきした算法(数学)を娘の章子(1)が書き留めたとされる和算の問題集であり、女性が編集した当時唯一の和算書として特に文化史的な観点から注目されている〔小寺2005〕。

本書を題材にして、昭和48年(1973)には児童文学作家の遠藤寛子が小説『算法少女』を著している。その内容は和算書『算法少女』の誕生秘話を物語にしたフィクションであるが、作中に和算の問題も収録されていることから、本書を数学の授業に教材として用いる教員もいるようである。ちなみに小説版は平成24年にコミック化され、平成28年にアニメーション映画となり劇場公開されるなど、和算モノとしては異例のメディアミックスによって話題を呼んだ。(3)

続いて、本稿の主役である丹波の算法少女こと佐藤小夜女を紹介しよう。彼女は明治7年(1874)6月10日に父善一郎、母不天の娘として備中国井原村(現岡山県井原市井原町)で生を享けた。(4)戸籍名は「いま」であり、小夜女は雅号である。彼女が幼くして算法の才能を開花させることができたのは、測量技師であり和算家であった父善一郎の影響によるところが大きい。彼女は10代半ばにして『繡技蝶々』(5)なる刺繍図案集を世に出しているが、本書に収録されているシンメトリックな幾何学図案などは和算の知識がなければ正確に描くことができないものとされる〔岸1977 14〕。

彼女は父の仕事にともない郷里を離れ、現在の福知山市夜久野町高内で暮らしていた時期があ



『繡技蝶々』(部分)(『井原町史』第1巻から転載)

り、滞在中の明治20年(1887)に妙龍寺の算額奉納に携わっている。当時、算額奉納者として女性が名を連ねることはきわめて珍しいことであり、なおかつ13歳の少女となると他に例がない。その意味でも小夜女は数学者として有望視された存在であったと思われるが、彼女はそれから2年後の明治22年に病に倒れて歸らぬ人となる。享年16(満15歳)であった。そのことを伝える墓碑が高内地区の共同墓地にひっそりと建てられている。墓石に刻まれた碑文は以下のとおりである。

爰曰備中後月郡井原算者佐藤善一郎一子小
夜女□(山カ)陰富素授来明治廿二己丑十二月八日
清霜満月享年十九而嗚呼奇哉妙哉終病死法
名贈縫算院殿弘教智妙大一字不説

雪や霜いとはぬ越ゆる旅衣 正三位中将鳥尾小
弥太書

これは当時枢密顧問官であった鳥尾小弥太(1848-1905)が書いた紙碑を墓石に彫ったものとされる。ちなみに碑文には誤記があり、享年19



佐藤小夜女の墓碑 (撮影日: 2018.3.30)

とあるのは16が正しく、「一字不説」とされている戒名の末尾には「姉」字が当てはまるものと思われる。さらに、後句の「いとはぬ」は「いとはず」でなければ句にならないし、身分の高い者に贈られる院殿号が少女の戒名に用いられている点は解せないところである。なにより不思議なのは小弥太と小夜女の関係性である。両者の結びつきについてははっきりしたことはわからないが、父善一郎が役人として地積測量に携わっていた時期になんらかの関わりができたのではないかという指摘がある〔桑原 1981 17〕。謎は深まるばかりであるが、小弥太は若き和算の才女小夜女の死を深く悼み、追悼文を寄せたものと思われる。市井の少女に贈られる墓碑としては実に立派なものである。

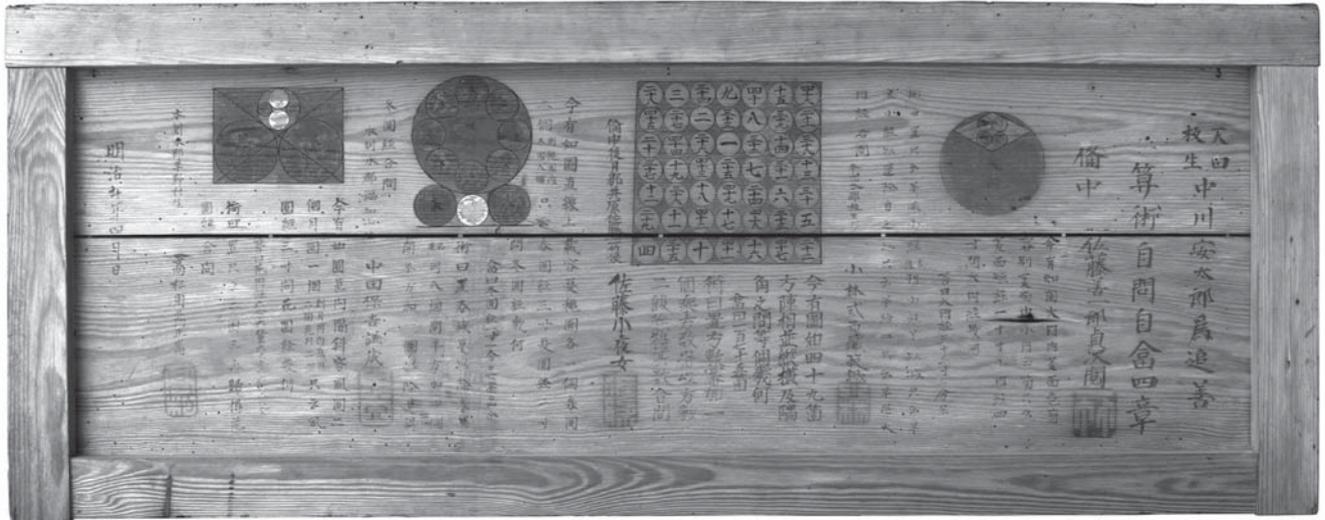
2 算額奉納 - 小夜女のユニークピース -

さて、次に小夜女の問題が掲載されている算額を詳しく見ていくことにしよう。その前に算額の特徴について確認しておきたい。

算額とは、読んで字のごとく算法の額であり、和算の問題・答え・術(解法)を図とともに掲載して絵馬のように寺社へ奉納したものである。

算額を奉納する理由は時代や地域によってさまざまであるが、難問が解けたことを神仏に感謝し、学業成就を祈願するためというほか、自らの数学力を世に問う研究発表の機会として利用するためや流派の宣伝に活用するためというケースが多い。

「算額奉納」の風習がいつから始まったのかは詳らかでないものの、江戸時代初期に奉納された算額が現存するものとしては最も古く、近代にかけて奉納されたものは全国各地で約900点が確認されている⁽⁶⁾。京都府内には現在までに23点が確認されており、うち4点が府北部に現存している。その中の3点は宮津市^{もんじゅ}文珠の智恩寺に伝わっている。すなわち、文政元年(1818)に伊根町新井の石倉浅治郎(1796-1881)が奉納したもの、文政12年(1829)に与謝野町後野の廣瀬儀光が奉納した^{うしろの}もの、天保8年(1837)に宮津藩士の新山正表が奉納したものである。奉納の理由はまちまちであるが、知恵の文殊で知られる本尊文殊菩薩にあやかって同寺に奉納したものと思われる。



妙龍寺の算額（幅 171.0 ×高さ 75.0cm 松板製 撮影日：2018.2.1）

残りの1点が妙龍寺の算額である。本額は明治20年(1887)に天田郡板生(現福知山市夜久野町板生)の中川安太郎なる石工の追善として佐藤善一郎とその門下生が奉納したものである。本額には自問自答4問を掲載しており、その1つに小夜女の設問がある。それは次のような内容である。



今有図如四十九箇方陣相並
縦横及隅角之間等個幾何
答曰一百七十五箇
術曰置方數冪加一個乘方
數冪以方數二段除得其數
合問

備中後月郡井原佐藤一竹娘 佐藤小夜女(印)

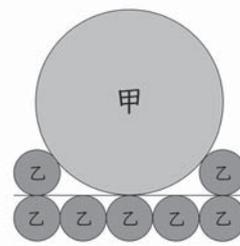
問題文を現代語訳すると、「図のように49個の数を並べた方陣がある。縦・横・対角線の等しい合計数はいくらか」となり、答えは175であると述べられている。

この問題は魔方陣と呼ばれる種類のものである。つまり、 $n \times n$ 個の枱をもつ正方形の方陣に数字を配置し、縦・横・斜め(対角線)のどの列に沿って足しても合計数が一定になるというもので、1から方陣の枱の総数 n^2 までの数字を1つずつ過不足なく使っているのが特徴である。小夜女の問題は1列に枱が7つあるので七方陣とも称される。附図を見ると縦横7つの枱目に「一」か

ら「四十九」までの数がばらばらに配置されており、縦・横・対角線の和が等しく175になることを確かめることができる。

また、小夜女は術曰くとして問題の解き方を論じており、それは「方冪に1を加えて方冪を乗じて方の2段で割る」というものである。2段とあるのは2倍のことである。つまり、 $1 + 2 + \dots + 49 = (49 + 1) \times 49 \div 2$ だから $(49 + 1) \times 49 \div (2 \times 7)$ と計算すれば175になる、というのが小夜女の解法である。術文にある「方」が7なので、 $\text{方冪} = \text{方}^2 = 7^2 = 49$ である。

これとは別に小夜女の出題を収録した算額がもう1点ある。それは兵庫県養父市左近山の延命寺(地藏堂)が有している。かつて地藏堂は寺子屋として解放されており、ここに善一郎が算法を教えに来ていたようである。⁽⁷⁾ 本額は明治21年(1888)1月に善一郎の門人が奉納したものであり、地元門人6名と小夜女による出題がある。小夜女の問題は次のような内容である。



今有如円直線戴甲乙八
円開直下之乙周上之乙周只言乙
円及甲周尖底線隣隣隣円径一寸問甲円径幾何
答曰四寸
術曰置只言二段自之以
只言除之得甲円径合問

備中国後月郡井原住 佐藤小夜女(印)

問いの文章を要約すると、「乙円の直径は1寸であるが甲円の直径は何寸か」ということを問うており、答えは4寸とある。続いてその術(解法)として、「只言を2倍してこれを自乗し、只言をもってこれを除して甲円径を得る」とある。術文にある「只言」は乙円径1寸のことを指している。現代式にすると、 $甲 = (2乙)^2 \div 乙$ となり、 $乙 = 1$ なので $甲 = 4$ となる⁽⁸⁾。

管見の限り、小夜女が携わった算額はこの2点のみである。いずれも彼女の面影を伝えるユニークピースである。一方、小夜女に和算を教授した父善一郎による算額はこの限りでない。続いて善一郎の足跡と功績についてもふれておきたい。

3 遊歴算家－旅する数学者 佐藤善一郎の足跡－

江戸時代には、諸国を旅して和算の叡智を伝え歩き、地方に埋もれた才能を発掘することに努めた和算家(数学者)たちがいる。人はのちに彼らを「遊歴算家」と呼んだ。彼らの活動によって高等数学や新しい理論が地方に伝播したとされる。

和算の知識を伝え歩いたという意味においては佐藤善一郎(1841-1902)も遊歴算家と呼ぶに相応しい人物であろう。彼は諱を貞次、号を一竹とし、備中国矢掛村(現矢掛町)の佐伯儀門(貞齋)に和算を学んだ後、常盤村溝口(現総社市)の藤田秀齋の門人となり小田県庁に仕え、播磨・山陽道・四国・山陰地方の地籍測量に携わった。彼は郷里を離れて測量技師として働きながら、行く先々で私塾を開いて地域住民に算法を講じ、教え子とともにその土地の寺社へ算額を奉納したようである。

善一郎とその門人が奉納した算額はこれまでに12点が確認されており、8点が現存している。和算の衰退期に奉納された算額としては異例の数である。このうち兵庫県高砂市の生石神社には明治9年(1876)9月に善一郎門人原鉄之助貞光他4名が奉納した算額が伝わっており、本額は昭和52年(1977)に高砂市指定文化財となっている。先述した地藏堂の算額も「左近山地蔵堂の算額絵馬」として昭和58年(1983)に養父町(現養父市)指定有形民俗文化財になっている。ちなみに小夜女を失った明治22年以降に善一郎が携わっ

た算額は確認されていない。彼にとって小夜女は一人娘であり、愛情と薫陶を注いだものと思われる。その後の彼の消息は定かでないが、役人を辞して郷里へ戻り、明治35年(1902)に62歳の生涯を終えたようである。晩年は算盤塾を開いて生計を立てていたとも伝えられている。彼の墓は井原市内の真宗大谷派常念寺にあり、墓碑に「釈善行信士明治三十五年一月十八日佐藤善一郎六十二才」とある。妻についても同碑に「釈妙恵信女大正十一年七月廿五日妻フデ七十八才」とある。



善一郎の墓碑 (撮影日: 2018.10.20)

4 遺題継承－和算文化遺産の継承について－

江戸時代前期に活躍した和算家の吉田光由は寛永18年(1641)に『新編塵劫記』を刊行するが、巻末に掲載した12問には解答を示さなかった。このように解答を読者に委ねる形式の設問を当時の人は「好」と呼び、のちの人は「遺題」と呼ぶようになった。遺題を解いた者はその解答とともに自ら考案した問題(遺題)を公表することが和算家の間でブームになった。このように遺題をリレー式に解いていくことを「遺題継承」という。ちなみに遺題はそれを出題する者が解けなくても構わないため難問も多く、遺題を解いた者が新たな遺題を出すため問題の内容は徐々に高度なものになる。遺題継承の風習は和算の発展と普及に大きく寄与するものであった。

ところで、善一郎と小夜女は上記のような遺題を遺しているわけではない。しかし、彼らが遺してくれた算額は文化財(文化遺産)として継承されているものもあり、地域の歴史や和算文化を伝えていく上で欠くことのできない地域資源となっている。ところが、それを保存し活用していく基盤となる地域社会が過疎化や人口減少等の影響により持続可能な継承のビジョンを描けないでいる。

こうした状況のなか、文化財を守り伝えていくための指針となる文化財保護法が昨年改正され、平成31年4月1日付けで施行される。文化庁によると今回の改正は、過疎化・少子高齢化等の社会状況の変化を背景に各地の貴重な文化財の滅失・散逸等の防止が緊急の課題となるなか、これまで価値付けが明確でなかった未指定を含めた有形・無形の文化財をまちづくりに活かしつつ、文化財継承の担い手を確保し、地域社会総がかりで取り組んでいくことのできる体制づくりを整備するため、地域における文化財の計画的な保存・活用の促進や地方文化財保護行政の推進力の強化を図るものであるという。

つまり、地域に存在する未指定を含めた有形・無形の文化財をまちづくりに活かすということは、妙龍寺の算額や小夜女の墓碑もその範疇となり、それに付随する小夜女のストーリーなども潜在的な地域資源としてまちづくりなどへの有効活用が期待されるということであろうか。

しかし、当該の算額や墓碑、そして小夜女の存在が地元ではあまり認識されていないという実情もある。例えば、彼女の墓碑は福知山市立夜久野中学校のグラウンドを挟んですぐの場所にあるのだが、筆者が取材をした際にはその所在を知る学校関係者は皆無であった。それは無理もない話であり、彼女の存在はまさしく土に埋もれており、平成25年に刊行された『夜久野町史』（第4巻）にかかる調査で発掘されるまで、その存在を知る地域住民はほとんどいなかったようである。

小夜女が著した『繡技蝶々』に至っては、超のつく稀覯本^{きこうほん}であり、確認されている唯一の所蔵者（個人）が故人となった現在、現物は所在不明の状態にある。

算額については、昭和55年（1980）に和算研究者の桑原秀夫がおこなった調査によって一部で存在が知られるようになり〔桑原 1981〕、『夜久野町史』によって文化的価値が見出されて地域でも知られるようになった。しかし、地域資源という意味ではアクセシビリティの点において課題を抱えている。すなわち、妙龍寺の算額は施錠されたお堂の中で保管されており、一般に公開されてい

るわけではない。それは地蔵堂の算額も然りである。いずれもお堂は無住である場合が多く、算額の管理は檀家や自治会等の地域住民が担っており、よそ者がアクセスするにはいくつかの手続きをとらなければならない。したがって、観光客がぶらりとお堂を訪ねて算額を拝観することのできる可能性はきわめて低いと言えよう。先述したように、算額は神仏に感謝したり祈願したりするためのスピリチュアルツールであるとともに、大衆の目にふれることを目的として奉納されたメディアツールとしての側面もある。それゆえに奉納する場所は大勢の人が往来し、ある種のアジール（自由領域）とされる寺社が選ばれたわけである。その意味からすると、算額は所有権の如何は別にして公共性の高い資源（公共財）とも言えるだろう。しかし、実際には死蔵に近い状態にあり、活用はおろか保存もままならないというのが現状である。

要するに、小夜女のストーリーや彼女のユニークピースは地域資源としてまちづくりや観光への寄与が期待されつつあるにもかかわらず、肝心のそれは死蔵または忘却に近い状態にあり、地域住民による保存対策は講じられているものの、改正文化財保護法が掲げている「活用」に資するためには課題が山積していると言えよう。

おわりに

今回の法改正では、文化財の適切な保存に加えてより積極的な活用に比重を置く方向性が示されるとともに、文化財を経済振興の核に位置付け、観光資源として活用するための制度的枠組みを整備する意味合いが含まれているとされる。これに関して問題点を指摘する有識者等も少なくない。

文化財の修復や維持において、厳しい財政事情を理由とした予算の制約が大きな支障となっている現状を踏まえると、文化財を観光資源として活用することで経済活動に貢献し、その受益を文化財の保存と活用に要する費用の財源に充てようとすることは現実的な政策として十分考慮に値する。しかし、観光振興による文化財の経済貢献が優先されると、結果的に観光あるいは経済に対して貢献度の低い文化財の保護が軽んじられるので

はないかという恐れがある。ひいては経済的利益という価値基準によって文化や文化財の優劣が拡大していくことが懸念されるとともに、経済効果の低い教育普及活動等が軽視されるのではないかという危惧もある。さらに、それは富裕層の需要を獲得する可能性がある一方で経済的弱者が文化や文化財に学び親しむ機会を得難くなるのではないかという一抹の不安もある。

最後に、自戒を込めて問いたい。文化財の活用とは、その保護を前提として、さまざまな立場の人が文化財に親しむことができ、その価値や魅力をシェアする機会を創出することではないだろうか。今回、和算の魅力やおもしろさを伝えるために佐藤小夜女のストーリーと彼女のユニークピースを活用して展示を構成したわけであるが、結果的に彼女がまるで天才少女であったかのような偏った認識を世に拡散させてしまったとしたら、それは筆者(担当者)の意図するところではないにせよ、その功罪は問われなければならない。

果たして彼女のユニークピースを地域社会で継承していくためには、いかなる「活用」のあり方が望ましいのだろうか。本稿ではその妙案を導き出すまでには至らなかったもので、これについては筆者からの遺題として読者に問いかけてみたい。

註

- (1) 当時は弟子の名前で師匠が執筆する風習もあり、本書の実際の著者は娘ではなく、千葉桃三ではないかとする説もある。
- (2) その1人が東大寺学園中学校・高等学校の教員であった小寺裕である。彼は絶版になっていた小説『算法少女』の復刊にも尽力している。
- (3) コミックス版は秋月めぐる『算法少女』リイド社 2012年、アニメ映画版は外村史郎監督「算法少女」赤の女王制作 2016年。
- (4) 和算研究者の岸加四郎(1907-89)は、佐藤家の戸籍・過去帳・墓碑を調べ、いま(小夜女)は明治7年6月10日生まれであり、明治22年に夜久野村高内で死去したことを確認している〔岸 1989〕。
- (5) 『繡技蝶々』は、縦22.0×横9.5cmの厚紙35枚を綴じたものであり、昭和52年に井原市西江原町の民家で発見され、「山陽新聞」1977年10月23日付で取り

上げられるなどして話題を呼んだ。

- (6) 「和算の館」<http://www.wasan.jp/>(2019年2月20日最終閲覧)を参照。
- (7) 2018年度佐古山区長の堀川国義氏からご教示いただいた。
- (8) 術文の解説と現代式については小寺裕氏からご指導を賜った。

参考文献

- ・一ノ宮一男 刊行年不詳「明治期における一無名和算家の生涯とその教育活動を追跡して」京都府立京都学・歴彩館蔵
- ・井原市 2005『井原市史』第1巻
- ・井原市教育委員会 2008『井原歴史人物伝郷土が生んだ偉人たち』
- ・遠藤寛子 1973『算法少女』岩崎書店
- ・鹿島秀元 2013「小説、漫画『算法少女』に現われる「和算」の問題の初等的解法」(『大阪商業大学論集』9-2)
- ・加藤幸治 2018『文化遺産シェア時代—価値を深掘る“ずらし”の視角—』社会評論社
- ・岸加四郎 1977「井原の和算家と算額」(『史談いばら』第5号 井原史談会)
- ・岸加四郎 1978「備中の和算家と算額」(『和算』第22号 近畿数学史学会近畿支部)
- ・岸加四郎 1989「佐藤小夜女出題の算額」(『山陽和算研究会会誌』第9号 山陽和算研究会)
- ・近畿数学史学会 1992『近畿の算額』大阪教育図書
- ・桑原秀夫 1981『美しい幾何学図形シリーズ37 丹波国熊野神社妙龍寺算額』近畿数学史学会
- ・壺中隠者(千葉桃三)・平章子 1775『算法少女』
- ・小寺裕 2005「『算法少女』の贈りもの」(『数学文化』第4号 日本評論社)
- ・小寺裕 2009『和算書「算法少女」を読む』筑摩書房
- ・小山響子 2010「一度は訪ねたい児童文学紀行(2)『算法少女』でめぐる神田・高輪」(『こどもの図書館』57-5号)
- ・福知山市 2013『夜久野町史』第4巻
- ・藤田貞資 1791『算法少女之評』
- ・文化遺産の世界編集部 2018『文化遺産の世界』Vol.33・三上義夫 1934「算法少女著者考」(『東京物理学校雑誌』第43巻第506・507号)
- ・水溪玄齋・美智女 1876『筆算早学』
- ・山川芳一編 1997『岡山県の算額』サンコー印刷
- ・山田悦郎 1977「生石神社の算額祭」(『和算』第17号 近畿数学史学会近畿支部)

「一色軍記」の成立過程

資料課 吉野健一

はじめに

中世丹後の一色氏の興亡を描いた「一色軍記」は、現存する一色氏に関する唯一の軍記物として、古くからその存在が知られており、昭和初年の『丹後史料叢書』にも全文が翻刻されている。本史料については、文化3年(1806)の奥書を持つ写本が存在していることから、江戸時代後期の時点で既に成立していたことは確実であるが、いつ頃、誰の手によって物語が作成されたのかは不明である。

また、「一色軍記」の記載内容については、「脚色の濃い軍記物」(『宮津市史』)などとされ、歴史的事実を必ずしも伝える史料ではないという評価がなされている。しかし、仮に物語として作成され、歴史的事実に反する脚色が多かったとしても、少なくとも江戸時代のある段階において、「一色軍記」なる書を著そうという動機がその著者にあったことは確実である。そのような動機はどうして生まれたのか、それを検討することは、江戸時代の丹後において、一色氏がどのように認識されていたのかを考える上で、重要な事柄であると考えている。

本論文では、その「一色軍記」の成立過程について、現在伝わっている写本や、記載内容などから、可能な限り復元することを試みたものである。なお、「一色軍記」の内容についても、検討する必要があるが、これは別稿を期したい。

1. 「一色軍記」について

「一色軍記」は、丹後一色氏の興亡を描いた江戸時代成立の軍記物である。名称は「一色軍記」であるものの、その記載内容は、室町時代前期の丹後守護一色満範以来の丹後一色氏の歴代を通史的に取り上げたものではなく、「一色義道」⁽¹⁾以降、天正10年(1582)に一色氏が滅亡するまでの最後の約5年間に限られている。このため、正確には、一色氏と織田氏(細川氏、明智氏)との間の丹後を巡る攻防戦を描いている作品であるということが

できよう。

なお、丹後においては中世の文書資料の残存状況が極めて悪く、著名な寺社においても一色氏の動向を示す史料はほとんど伝わらない。このため、戦国時代の一色氏の丹後での動向や、一色氏内部の状況などについては、不明な点が多い。

2. 「一色軍記」の諸本について

では、ここからは、その「一色軍記」の諸本について、その関係性と所在状況について検討することとする。

昭和2年(1927)に刊行された『丹後史料叢書』は、丹後地域に残る多くの古文書等を翻刻掲載しており、当時としては画期的な成果を示したものであるが、その第一集に「一色軍記」が採用されている。「一色軍記」の説明として、編者の一人である永浜宇平は、「右一色軍記原本何れにか失せ、写本巷間に流布するも精粗繁簡一様ならず、皆筆者の作為する所ならんか、今金剛心院蔵本をもととし、拙蔵本を参酌して茲に収む」と記している⁽²⁾。

この時、永浜が使用した金剛心院本は、現在も同寺の蔵となっているが、注目すべきは金剛心院本の奥書である。以下に奥書部分を引用する。

文化三寅年

正月写之

于時嘉永三年

庚戌四月写之者也

丹後国与謝郡日置上村

秘密山金剛心院

法印 深聴代(印)

この奥書から、金剛心院本は、嘉永3年(1850)に、文化3年(1806)に書写された本から写されたことが判明する。後に、この金剛心院本のもとなった写本が、竹野神社で確認された。

この竹野神社本をはじめて全文翻刻した、宮津市教育委員会『古代中世の宮津』は、金剛心院本と竹野神社本の関係について、『丹後史料叢書』

本は、文化三年の写本を、嘉永三年に書写した金剛心院本を底本としている。この文化三年の書写にかかるものが、今回展示した竹野神社本と考えられる⁽⁴⁾としている。

竹野神社本の詳細を以下に検討すると、まず表紙には、「文化三年／一色軍記／寅正月」とあり、また巻末に奥書として「右、一色家随身の諸将城跡砦九十一ヶ所、一色軍談終／文化三年寅年／正月写也」とある。この記載は、先に挙げた金剛心院本の奥書と共通することから、先行研究が示すとおり、金剛心院本が竹野神社本を底本として書写されたことは確実である。

しかし、竹野神社本がどのように成立したのかについては、明らかにしえない。竹野神社本の裏表紙には、2行に渡って、恐らく旧蔵者を示すと思われる各数文字程度の文字が記されるが、経年の劣化や擦れにより判読できない状態となっている。

金剛心院本は、金剛心院で書写されたことが奥書から確実であるが、竹野神社本については、竹野神社関係者が書写したものか、あるいは別の場所で書写されたものが、何らかの理由によって竹野神社に架蔵されることになったのか、この点が判然としない。また、文化3年に写されたことは確実であるが、その写本の元となった資料についても奥書等には記載がない。しかし、現段階においては、書写年代が判明する最古の「一色軍記」であり、もっとも良質な写本であるということができよう。

一方、「一色軍記」には、この竹野神社系とは異なる写本も複数確認できる。便宜的に、これまでの史料を「竹野神社」系統とすると、「史料叢書」

系統とも言うべきもので、『丹後史料叢書』記載のものと類似するもの、あるいはそこから派生した可能性のあるもの、である。

まず、その「史料叢書」系の写本として、「永浜宇平旧蔵本」を挙げることができる。『史料叢書』内の追記で、永浜宇平は、「金剛心院蔵本をもととし、拙蔵本を参酌して茲に収む」とするが、この「拙蔵本」については、それ以上の言及がなく詳細は不明である。

永浜宇平が、『史料叢書』に「一色軍記」を翻刻するにあたり、どの部分を「参酌」したのか言及がないため、どのような方針で校訂がなされたのかは不明であるが、実際に両書と比較してみると、大きく異なる部分もあり、金剛心院本を一定程度改編したことは確実である。

また、「一色軍記」には、『竹野郡誌』（大正4年、竹野郡教育会）に引用されているものもあるが、これは、引用元が不明であり、また、網野町郷土文化保存会が、昭和60年（1985）に出版した『一色軍記』も、「一色軍記」の翻刻であるが、底本に関する記載が不十分で、もとの史料の詳細を明らかにしえない。

さらに、「一色軍記」には、上記の2系統以外の写本も存在する。ひとつは、舞鶴市の糸井文庫本で、奥書等はなく、書写年代は不明である。表紙には「天正歳中／丹後一色軍記」とあり、また一丁目には「宮津住関文庫」「丹後国歴史編纂期成同盟会創立者宮津関清謙」のそれぞれの方印が捺されていることから、本史料は、元宮津藩家老の関左門の子である関清謙の旧蔵本であることが確実である。紙質や文字の様子からは、江戸最末期から明治ころの写本ではないかと推定される。

「一色軍記」残存状況

名称	書写年代	記載順序	系統	備考
竹野神社本	文化3年（1806）	①②③	竹野神社本系	宮津市歴史資料館『古代中世の宮津』（2005）に翻刻あり
金剛心院本	嘉永3年（1850）	①②③	竹野神社本系	『丹後史料叢書』の底本の一つ。
史料編纂所本	明治20年（1887）	—	竹野神社本系	金剛心院本の写し
糸井文庫本	不明（幕末力）	①③	—	宮津関清謙旧蔵本
個人蔵本	不明（江戸後期力）	①③	—	表紙に「小倉筑前守扣 末葉伊右エ門」とあり
史料叢書翻刻	—	②①③	史料叢書本系	『丹後史料叢書』の翻刻
永浜宇平旧蔵本	—	—	史料叢書本系？	所在不明。原形態等不明。
竹野郡誌翻刻	—	①②③	史料叢書本系？	原典不明。
網野町郷土文化保存会本	—	②①③	史料叢書本系	『丹後史料叢書』の翻刻とほぼ同文。僅かに違いあり

記載順序は①が一色軍記本文、②が一色氏系譜、③が諸将城跡である。

また、これとは別に近年確認された個人蔵本も存在する。この個人蔵本は、奥書はないが、表紙には、「天正年中／丹後一色軍記／小倉筑前守扣／末葉伊右衛門」とある。

「天正年中」と「丹後一色軍記」とする点は、先に挙げた糸井文庫本と共通するが、この個人蔵本は、その後に、「小倉筑前守扣」以下の記載があり、一色氏の配下にいた小倉氏の末裔の家に伝わったことをその伝承として伝えている。この記載が事実かどうかは判断が難しいが、小倉筑前守は、「丹後旧事記」には「栗田小田城主小倉筑前守」とあり、「丹哥府志」にも「小倉筑前守は、小倉播磨守の一族なり、其ノ城墟より左の方谷道少し行て堀江伊予守の城墟あり、郭のかたち今に残る」などと伝わる人物である。

個人蔵本の表紙の記載を信じれば、この小倉筑前守の子孫である「伊右衛門」が所持していたということであるため、もと小倉氏の居城が存在した、現在の宮津市栗田周辺に伝来したものであろうか。

また、この個人蔵本は、1頁に6行書きで、比較的整った字で記載がなされていることも指摘でき、読本としての形式が整っているようにも思われる。類似の写本が確認できないため、比較が難しいが、読みやすいような改変が、もとの写本に加えられている可能性も残る。

書写年代は、奥書等からは明らかにしえないが、文字や紙質などから、幕末から明治初年ころの成立にかかる可能性が高いと考えられる。

一方、記載の内容を比較すると、「一色軍記」には、本文に加え、一色氏の系譜、そして諸将城跡として、丹後各地の城の名称と城主を書き上げた部分の3ヶ所に分けることができる。これら3ヶ所の成立における前後関係は類推せざるを得ないが、本文がまず成立し、その後に、その記載を補うような形で一色氏の系譜、諸将の城跡部分が追記されたものと考えられる。

このうち、一色氏の系譜の部分は、糸井文庫本、個人蔵本には存在しない。一方、諸将城跡を書き上げた部分は、竹野神社系を含め、若干の本文の異同はあるものの、各写本にその記載を確認する

ことができる。

これらの記載内容や、写本の残存状況から検討すると、「一色軍記」には、まず「原一色軍記」とでも呼ぶべきものが存在し、これを補う形で諸将城跡部分がまず成立したと推定される。その後、この本に系譜部分が更に追加されたものが竹野神社系統として流布し、金剛心院で幕末に書写された。一方、系譜部分が追記されずに、書写されたものとして、糸井文庫本や個人蔵本が成立したと推測される。系譜部分が追記された竹野神社本は、文化3年には成立していることから、それ以前には、糸井文庫本や個人蔵本の元となる写本（系譜部分が追記されない写本）が成立していた可能性も考えられる。

一方、史料叢書系の写本は、途中に何らかの編集が加えられている可能性が高く、竹野神社系や糸井文庫本、個人蔵本などとの直接的な関係性は原本が伝わらない現状では明らかにしえない。しかし、江戸時代後期に成立している「丹後旧事記」の引用部分には、すでに一部編纂が行われている跡が確認できることから、この「丹後旧事記」編纂の際に「原一色軍記」に何らかの改編が加えられている可能性も考えられる。

4. 「一色軍記」の名称

これまで見て来たように、「一色軍記」には、竹野神社本や個人蔵など複数の写本が存在しているが、ここでは、その「一色軍記」の題名について検討することとしたい。

書写年代が確定する最古の写本である竹野神社本の表紙には、すでに「一色軍記」とあり、また同本の内表紙にも「一色軍記」と記されている。ところが、その奥書部分には、「右、一色家随身の諸将城跡若九十一ヶ所、一色軍談終」とあり、「一色軍談」なる記載が見える。「一色軍談」と記した資料は現状では他に確認できておらず、「一色軍記」の誤写、もしくはその別名であったものと考えられる。

一方、「個人蔵本」には、「天正年中／丹後一色軍記」とあり、単に「一色軍記」ではなく、「丹後」が頭に加わっており、「丹後」が加わる写本とし

ては、「天正歳中／丹後一色軍記」と記す糸井文庫本を挙げることができ、両本の関係性を示唆する。記載の「天正年中」は、「一色軍記」本文の記載が、天正年間の5年程に偏っていることにも合致している。

ところで、文化7年(1810)に成立した「丹後旧事記」には、一色氏の城主などを記す部分に「一色家之事並軍記之事及諸所城主之事」とあり、また天保7年(1836)に書写された「丹後国城之事丹後国城主之事」(個人蔵)という資料にも、「大井村山城 牧左近之進 軍記に左馬亮とあり、細川ニ降り家士となる」とある。これらのことから、江戸時代の後期には、すでに本書は「一色軍記」もしくは単に「軍記」と呼ばれており、丹後においては一定程度の広がりをもって知られていたものと考えられる。

5. 「一色軍記」の成立年代

続いて、「一色軍記」の成立年代について検討することとする。方法としては、まず、「一色軍記」の記載内容からの検討を行い、加えて「一色軍記」の写本作成過程からも検討することで、具体的な実像に迫ることとしたい。

ところで、「一色軍記」の本文には、同書の成立に至る経緯が記されている箇所が2ヶ所存在する。これらから、「一色軍記」の成立について、その経緯の一部を復元することが可能であるが、その字句は、写本によって微妙に異なることから、この2ヶ所を記した写本それぞれの翻刻を以下に記すこととする。

【前段部分】

「此時廿三度ノ軍記府中ニ一色末葉有て紛失す」
(竹野神社本)

「此頃廿三度の軍記ハ府に有て紛失致候」
(舞鶴市糸井文庫本)

「此後廿三度之軍記ハ、府中に有シなれども、紛失に給ふ」
(個人蔵本)

「此時廿三度の軍記府中に一色末葉有て紛失す」
(『史料叢書』翻刻)

「其後二十三度ノ軍記府中一色ノ末葉ニ有テ

紛失ス」

(西原本「丹後旧事記」)

この記述は、「一色軍記」の前段、「一色式部大輔義道之事」のうち、天正6年12月頃の一色方と信長方の大内山などでの戦いを記した後に確認できる。すなわち前後を記すと、以下のとおりである。

(前略)十二月朔日、明智光秀に談して、日置籠城の武将松井四郎右衛門を長岡の軍將に頼む也、將軍信長公、光秀の頼に任せ、加佐郡大内山へ主従四百余人入城す、有吉將監是に同意して、長岡の陣代となる、明智光秀のいはく、皆信長の命なりと事をはかる、〈此時廿三度ノ軍記、府中ニ／一色末葉有て紛失す〉天正七年正月廿一日、一色義道終に戦ひ負けて、八田の城を引払ひ、中山の城沼田幸兵衛が固へ退き、残軍を取集め、奥郡へ引退かんと談しけるを(後略)

(竹野神社本「一色軍記」)

この記載で注目すべきなのは、本文の中に注の形式(写本によっては割注でないものもある)で「一色軍記」の「紛失」の経緯が記されていることと、その内容は一部文意が取りにくい箇所があることである。

本文の始めの部分にあたる、「此時廿三度ノ軍記」は、意味が取りにくいのが、竹野神社本、糸井文庫本、史料叢書を含め、いずれも同様の文字として写している。西原家本「丹後旧事記」は、「廿三度」を分かりやすく記すために「二十三度」と書き換えたものと思われるが、少なくともこの「丹後旧事記」を写した人物は、「二十三」という文字が記されていたと、解釈したものと考えられる。

この「廿三」については、「一色軍記」の中段に、一色氏が細川方と戦う際の台詞として、「是迄廿三度の戦に、某か高名数を知らず、君も人もしる所なり、夫故義道公御感の御墨付数通たまわり(以下略)」とあることから、一色氏のこれまでの戦いの回数を、数えたものである可能性も考えられる。そうであるとすれば、この時までの一色

氏の歴代が戦った記録が、この「一色軍記」とは、また別に存在していたという可能性も否定できない。

ただし、現在のところ、この「廿三度之軍記」に相当する史料は確認できていない。

また、それ以外に、丹後府中に一色氏の末裔があって、その人物が持っていたが紛失したという内容も伝わっているが、これも個人蔵本では、一色氏末葉の部分が記されないなど、一部に違いがある。ただ、全体像としては概ね同様である。

つまり、この部分から判明するのは、この天正6年末ころの状況を詳細に記した「軍記」が存在していたが、府中に居住していた一色氏の末裔が紛失したということである。

この「軍記」は、これが記されている「一色軍記」とは異なるものであることは確実であるので、別の軍記が存在していた可能性は指摘できる。

なお、天正6年冬頃に、丹後において上記のような合戦が行われたことは確認できず、後世の創作であろうことは注意される必要がある⁽⁵⁾。

では、続いて後段の記述に移る。後段の「一色軍記」成立に関係する記載は、天正10年1月25日の戦乱を述べた部分に存在するが、「一色軍記」は、この日の戦闘の記載の途中で唐突に話が終了している。

これについても、写本によって若干記載が異なることから、主要な写本の記載を以下にそれぞれ掲げることとする。

「此後ノ軍記ハ府中村ニ而寛永ノ頃焼失ス」
(竹野神社本)

「此後之軍記、府中村ニ一色家の末葉有之、此家ニ伝リ候処、寛永年中ニ焼失致、相訳リ不申候」
(舞鶴市糸井文庫本)

「此後の軍記、府中村一色の末葉有之、所持いたし候処、寛永之頃焼失すと云々」
(個人蔵本)

「其後の軍記不知分は、一色の末葉府中中村一色三郎右衛門の筆にて、寛永元年甲子仲夏記せし書にて、いづれの時に焼失候哉、火にかゝりたる紙数前後取乱れて五十七枚残り」

(『史料叢書』翻刻)

「其後ノ軍記不知、此分ハ一色ノ末葉府中中村一色三郎右エ門筆ニテ記ス、寛永元甲子トアリ、何レノ比焼失ニヤ、火ニ入りタル紙数前後乱テ五十七枚残レリ」

(西原本「丹後旧事記」)

これらの記載を比較すると、内容は大きく異なるもの、その記載の精粗は大きく異なっている。竹野神社本が、これ以降の軍記は寛永年間に府中村(現宮津市)で焼失したと、簡潔に記しているのに対し、糸井文庫本、個人蔵本は、この本を、府中村に居住していた一色氏の末葉が所蔵しており、寛永年間に焼失したとする。

一方、史料叢書本と、西原本「丹後旧事記」では、一色氏の末葉で、府中村に居住していた一色三郎右衛門という人物が、寛永元年(1624)に記した本が、いずれの頃に焼失して、その前後が取り乱れ、57枚ほどが焼け残ったと伝えている。この焼け残ったという記述は、この「一色軍記」に、現在伝わる箇所よりも前の時代を記載した部分が存在していたということを示唆するものだろうか。

これらの記載を比較すると、もとは竹野神社本のような伝わり方をしていた焼失の事情が、後に何らかの情報が加えられて詳細な記載となった可能性が高いと考えられる。結果、いずれにも記される寛永年間に、軍記が成立した時期なのか、あるいは火災で焼損した時期なのかについて齟齬が生じることとなっている。

さて、本記載の前後を引用すると、以下のとおりとなる。

(前略)長岡興元たまり兼、本陣さして引たりけり、薄暮限二軍終り候と注進ス、義清・大江不斜、今に初ぬ石子・金江・加納か手柄、連書似テ申入へし、興元斯て打まけなハ、田辺へ加勢を乞へし、今夕逸見ノ五郎・同八郎二千賀常陸守を差添、夜討の評定相極る
此後ノ軍記ハ府中村ニ而寛永ノ頃焼失ス、

一、天正十年午五月廿八日、弓木山落城、一色五良義清宮津大手角の家二而切腹、則塚有残徒秀吉立ル、(以下略)

(竹野神社本「一色軍記」)

記載のとおり、「一色軍記」の記載は唐突に終わっていることから、この寛永年間の火災による焼損が事実かどうかは確定が難しいが、本来はもう少し「一色軍記」本文の記載が続いていた可能性は十分に考えられるであろう。

一方、焼損の記載の後の部分は、一つ書きの形式で記されており、本文にも台詞や情景描写などは記載されない。また、これ以降の部分が記載されない写本もある。これらのことから、焼損の記載以降の部分は、後世に追加されたものと考えられる。

おわりに

本論文では、「一色軍記」の諸本の成立時期などを、軍記の本文記載や、諸本の伝来などをもととして検討を行った。現時点では、成立年代を確定させることはできないが、寛永年間に焼失したという伝承があることも考慮すれば、文化3年の竹野神社写本が成立するよりも、一定程度以前(江戸時代中期頃か)にはすでに「原一色軍記」なるものが成立していたものと考えられる。

その後、系譜や諸将城跡部分が追加され、また本文にも改編が加えられ、複数の系統で写本が作成されたものであろう。今後、更に写本等を搜索し、「一色軍記」成立の実態に迫りたいと考えている。

注

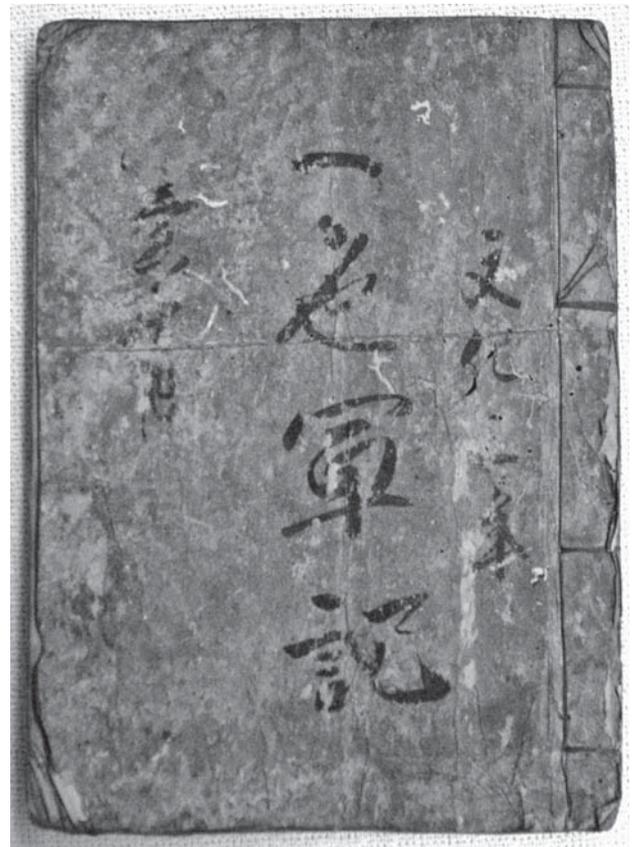
(1) 一色義道は、天正年間に没したとされる丹後一色氏の当主であるが、その事跡などの詳細は不明な点が多い。なお、「一色軍記」では、この一色義道は、天正7年1月21日に、明智・細川氏との戦いで八田城を引き払ったのち中山城にて自害したと伝えるが、天正7年1月のこの戦いについては、他の資料では確認できない。

(2) 『丹後史料叢書』第1輯(昭和2年、永濱宇平他編)、「一色軍記」の後記による。

(3) なお、金剛心院本は、後に東京大学史料編纂所が明治20年(1887)に写している。

(4) 宮津市歴史資料館『古代中世の宮津』(2005、宮津市教育委員会)では、竹野神社本一色軍記について翻刻がなされているが、『竹野郡誌』本と『丹後史料叢書』本と、竹野神社本との記載内容の相違について、『竹野郡誌』本も『丹後史料叢書』本も、竹野神社本と大きく異なる点もあり、(中略)校訂を行った永濱宇平が、独自の知見により書き加えたことも推測される。また、永濱が別本を所持していた可能性も考えられる」との見解を示している。

(5) 『織豊期主要人物居所集成』などの研究成果によれば、天正6年冬に、織田信長、明智光秀、細川藤孝はいずれも丹後へは来ておらず、また「一色軍記」の記載以外に、天正6年の冬に丹後周辺で一色氏と織田氏の軍勢が合戦に及んだという記述は確認できない。



「一色軍記」表紙(竹野神社本)

平成 30年度の資料整理

1 民俗資料

(1) 舞鶴市今田の堂本^き誠太郎製作瓦資料

企画展「ふるさとミュージアムコレクション」に出展するにあたり、今年度新たに受け入れた堂本誠太郎製作瓦資料の整理を行った。堂本誠太郎(1877-1968)は舞鶴市今田に生まれ、京都の製瓦業窯元西村彦右衛門に入って京瓦業界の発展に尽力した人物であり、製瓦業界において伝説的に語られる瓦職人である。当該資料は、堂本が製作した瓦(獅子口瓦、瓦当、瓦製鍾馗像)3点と瓦製作品(平安神宮の鴟尾模型など)4点であり、これらについて、クリーニング作業をはじめ、写真撮影、計測、分類番号を附す作業などを行い、整理が完了した資料を企画展に出品した。

2 考古資料

(1) 縄文時代資料の整理

企画展「地球環境と縄文文化」開催にあたり館蔵および寄託の縄文関係資料の整理を行った。

3 歴史資料

(1) 館蔵古文書目録のデータベース化

昨年度に引き続きデータベース化を行うとともに、本年度新たに整理した目録のデータ化も行った。項目は、作成日時・文書名・差出及び宛名・員数などの中核部分に絞って行った。整理済み点数と文書群は以下のとおりである。

・文書群12件、計約7,800点

(2) 館蔵古文書資料の目録整理

当館に寄附・寄託された未整理の古文書および、特別展準備のための資料調査を行い目録を作成した。

・与謝郡日置上村山口家文書 約500点

昨年度において調査を終了していたが、確認作業中に発見された未整理の文書や、追加で調査を行ったものである。現在は、目録の確認作業を継続して行っている。

・丹後国加佐郡由良村中西家文書 約300点

丹後国由良村で酒造業などを営んでいた中西家に伝わった文書で、近世から近代にかけての文書が残る。廻船や村政に関わる文書や、教科書類な

ども伝来する。現在も調査を継続中。

・丹後国宮津町三上家文書 約800点

三上家住宅で著名な宮津城下で酒造業などを営んでいた三上家に伝来した文書。すでに、目録作業は終了し、目録は刊行済みであるが、卷子状にまとめられた書状や触書、相場表などを一点一点新たに目録作成を行うこととし、現在も調査を継続中である。

ほか4件2,800点の整理を行った。

(3) 古文書調査

宮津市及び伊根町の個人宅の古文書調査を行った。いずれも現在調査を継続中である。

このほか、ボランティアによる古文書整理を開始した。古文書に習熟したボランティアによる古文書整理は古くから実施しているが、新たに始めたのは初心者を含めて広く古文書に興味のある方を対象に、古文書の取扱い方法や目録の取り方などの講習を行ったうえで、修了者に参加していただいた。作業は隔週で行い、資料館所蔵資料のうち、岩崎英精収集資料などの再調査を実施した。

4 写真等整理

写真カードの内容をエクセルで入力し、データベース化して検索の利便性を向上させた(継続作業中、今年度までで11,396枚が終了)。

5 資料の受け入れ

【寄附】

新たに受け入れた資料は以下のとおりである。

・林田家の酒造用具 68点

1. 一斗枘(斗搔き棒付き) 1点
2. ササラ 1点
3. 小杓 1点
4. 箒 1点
5. 蒸籠 1点
6. エブリ 1点
7. かき桶 1点
8. さる 1点
9. 休座 1点
10. 分司 1点
11. 名称不明用具 2点
12. 麴蓋 4点
13. 麴盛枘 1点

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 14. 麴枘(斗搔き棒付き) 1点 | 2. 太鼓 2点 |
| 15. 箱麴杵・蓋 1点 | 3. バチ(サイズ大) 4点 |
| 16. ヘラ櫂 3点 | 4. バチ(サイズ小) 2点 |
| 17. 暖気樽 1点 | 5. 太刀 1点 |
| 18. 半切り 1点 | 6. 鏡祓 1対 |
| 19. 漏斗 1点 | 7. 鉦 1点 |
| 20. 酏櫂 1点 | 8. 一文字笠 1点 |
| 21. 汲杓 1点 | 9. 鈴 2点 |
| 22. 重石 1点 | 10. 不明用具(衣装関係カ) 8点 |
| 23. 小判桶 1点 | 11. 袴 1点 |
| 24. 試桶 1点 | 12. 軽衫袴 1点 |
| 25. 栓抜 1点 | 13. 刺し子 1点 |
| 26. 担い棒 2点 | 14. 造花 5点 |
| 27. 瓶保護用菰 2種2点 | 15. 日の丸扇 2点 |
| 28. 木樽 1点 | 16. 幟 2点 |
| 29. 壺(岩見焼) 1点 | 17. 幔幕(祭り幕) 1点 |
| 30. 陶器壺 2点 | 18. 暖簾 3点 |
| 31. 通い徳利 1点 | 19. 袋(太刀入れカ) 1点 |
| 32. 打栓機 1点 | 20. 土器 3点 |
| 33. 亀屋酒造ラベル 4種一括 | 21. 三方 1点 |
| 34. 酒瓶運搬具 1点 | ・宮津市大島の消防用具 2点 |
| 35. 角樽(祝事用) 1点 | 1. 消防旗 1点 |
| 36. 算盤 1点 | 2. 纏 1点 |
| 37. 銭枘 5点 | ・宮津市大島の生活用具 5点 |
| 38. 杜氏作業着 一式 | 1. ステープラー 1点 |
| 39. 前掛け 1点 | 2. 厘秤 1点 |
| 40. 看板 3点 | 3. 温度計 1点 |
| 41. 瑠璃看板 1点 | 4. 鯨尺 1点 |
| 42. 清酒計(アルコール濃度計) 1点 | 5. 一斗枘(斗搔き棒 1点付属) 1点 |
| 43. 蒸留器 1点 | ・堂本誠太郎製作瓦 7点 |
| 44. 柄杓 1点 | 1. 瓦製鴟尾模型 1点 |
| 45. 鉤 1点 | 2. 瓦製香合 2点 |
| 46. 泡尺 2点 | 3. 瓦当 2点 |
| 47. 篩 1点 | 4. 獅子口瓦 1点 |
| 48. 桶 1点 | 5. 瓦製鍾馗像 1点 |
| 49. 運搬具 1点 | 【寄託】 |
| 50. 運搬具 2点 | 新たに寄託された資料は以下のとおりである。 |
| 51. 運搬具 1点 | ・獅子崎村文書「乍恐奉願上候口上覚」 1点 |
| ・林田家文書 一括 | 丹後ちりめん歴史館 |
| ・宮津市大島の祭礼用具 44点 | ・丹後国与謝郡加悦町下村家文書 一括 |
| 1. 獅子頭 1点 | 個人 |

丹後学び舎セミナー活動報告

1 紙すき教室

平成30年度も、紙すき同好会と共催で実施した。日程・作業は以下のとおりである。

11月17日(土)：カゴカリ(楮の刈り取り)

11月18日(日)：カゴムシ(楮を蒸す)・カゴヘギ(楮の皮を剥ぐ)

11月24・25日(土・日)：カゴナゼ(楮の表皮を取り除く)

12月1日(土)：カゴニ(楮の皮を煮て柔らかくする)

12月8日(土)：紙すき、11日(火)：紙ツケ(紙を乾燥させる)

2 ぶらり丹後

学芸員の解説を聞きながら歩くことで、おなじみの場所の新たな魅力を発見できる現地講座を今年度も実施した。

第1回 天橋立

・日 時：5月26日(土) 13時30分～15時30分
 ・行 程：天橋立駅－智恩寺境内(算額・庚申塔・地蔵・力石等)－智恵の輪灯籠－文殊港の灯明台－廻旋橋－船着場跡－与謝野寛・晶子夫婦の歌碑－磯清水－天橋立神社(橋立明神)－一里塚－千貫松－籠神社

・案内人：当館資料課副主査 青江智洋

・内 容：日本を代表する景勝地として日本三景のひとつにも数えられ、多くの観光客が訪れる天



そばを作ろう 種まき・案山子づくりの一齣

橋立は、古代から歌枕の地であり、都人にとっても憧れの地であった。今回は春季企画展に関連して智恩寺の算額を取り上げるとともに、天橋立をめぐる人びとの暮らし(民俗)に注目して関連史跡等を散策した。

・参加者：13人

第2回 宮津城

・日 時：10月13日(土) 13時30分～15時30分

・行 程：大手川ふれあい広場－大手橋－大手川右岸－宮津小学校(移築太鼓門)－旧保健センター(外堀南辺折れ)－宮津駅(内堀南東角)－関西電力(内堀土橋)－宮津警察署(内堀)－流域下水道ポンプ場－たもの木(二ノ丸北東角)－京都北都信用金庫本店別館(本丸北東部)－宮津武田病院前(石垣石材(移築))－宮津武田病院内(本丸石垣・敷地外から展望)－一色稲荷－大手橋－大手川ふれあい広場

・案内人：当館資料課長 森島康雄

・内 容：宮津城は、明治初年に廃城となり、市街化によって、地上にその姿をほとんどとどめていないが、地下には堀や石垣が良く残っていることが発掘調査によってわかっている。近世の城絵図に現代の道路や主要建物を重ねた地図を手に、かつては堀端であった道路をたどり、発掘調査で堀や石垣が発見された場所などを巡った。

・参加者：5人

第3回 府中

・日 時：11月10日(土) 13時30分～15時30分



ぶらり丹後・宮津城の一齣

・行程：籠神社－眞名井神社－中野－本坂道入口－妙立寺－安国寺遺跡－寶林寺跡－北野－丹後国分寺跡－丹後郷土資料館

・案内人：当館資料課副主査 吉野健一

・内容：府中は古代・中世の丹後の中心地であった。今回は、小字図を手に、眞名井神社から籠神社の裏を抜け、雪舟の天橋立図に描かれた寺社跡や近年の発掘調査で丹後国府の可能性が高まった安国寺遺跡などを、古道をたどりながら散策した。

・参加者：11人

3 古文書講習会

昨年度に引き続き、資料館友の会と共催で実施した。

実施日は、5月19日から12月15日までの7回の土曜日に、午前は実践編、午後は入門編として1日に2講座、計14回行った。参加者は入門編が延べ244人、実践編が延べ90人であった。

入門編

今年度は、漢字の偏や旁といった部首ごとの崩し方や、平仮名・片仮名の様々な崩し方など基本的な部分に重点を置きながら講座を進めた。資料としては「山海名産図会」や「己巳記遊」の稿本などを利用して行った。

実践編

今年度は、安政6年(1859)の「御省略被仰出帳」を読み進めた。この資料は、幕末の藩財政逼迫に伴って命じられた倹約の内容が記されている。城門を開けている時間を減らしたり、橋の管理を町

方に任せたり、筆・墨・紙の節約をしたり、藩校に通う子どもたちへの褒美を削減したりと、さまざまな工夫をしていたことが読み取れた。

4 子ども体験教室

「夏休みに作ろう」は、勾玉・銭・鏡をそれぞれ4回ずつ、「そばを作ろう」は4回のシリーズで、資料館友の会と共催で実施した。

勾玉づくりでは、滑石を紙やすりで磨いて思いの形の勾玉をつくるのであるが、勾玉の歴史を勉強した後、古墳から出土した勾玉に触れる体験も実施した。

銭づくり、鏡づくりは、それぞれ和同開珎、内行花文鏡のミニチュアを、低溶融合金を耐熱シリコン型で鑄造して紙やすりなどで研磨して完成させた。これも、体験の前に鏡やお金の歴史について勉強し、類似の実物資料を間近に見る機会を設けた。

参加者は勾玉づくりが239人、銭づくりが241人、鏡づくりが154人であった。

そばづくりは、8月25日の種まき、11月3日の刈り取り、11月24日の脱穀、12月16日のそば打ちの4回、各工程を体験した。参加者は延べ145人であった。



ぶらり丹後・府中の一瞥



古文書講習会の一瞥

平成30年度のあゆみ

- 4.1 常設展「海国・丹後を巡るー丹後の歴史と文化ー」 (～3/31)
- 4.11 古文書整理ボランティア (4/26、5/9・23、6/6・20、7/11・25、9/12、10/10、11/28、12/12、1/23、2/13、3/13)
- 4.28 春季企画展「丹波の算法少女ー楽しみながら学ぶ和算と算額ー」 (～6/10)
展示解説 4/29、5/27
- 4.28 特別陳列「寄附購入史料展」 (～5/13)
- 5.3 映画上映会
長編アニメーション「算法少女」(6/2)
- 5.12 文化財講座①
「楽しもう！和算をー江戸時代の算法ー」
講師：日本数学史学会運営委員長 小寺裕氏
- 5.19 古文書講習会 (6/16、7/14、9/8、10/6、12/1、12/15)
〔午前:実践編、午後:入門編〕
- 5.26 ぶらり丹後「天橋立」
- 7.14 夏季企画展「地球環境と縄文文化」(～8/26)
展示解説 7/16、8/19
- 7.21 こども体験教室「夏休みに作ろう」
勾玉(7/21、7/26)、銭(8/4、8/17)
鏡(8/10、8/18)
- 7.28 文化財講座②
「環境が変えた縄文人の心と社会」
講師：国立歴史民俗博物館 教授 松木武彦氏
- 8.11 文化財講座③
「暴れる気候と暴れない気候ー人類は激動の時代をどう生きたかー」
講師：立命館大学古気候学研究センター長 中川毅氏
- 8.25 こども体験教室「そばを作ろう」 (11/3、11/24、12/16)
- 9.8 企画展「智恩寺の頂相」 (～9/24)
- 9.15 特別陳列 重要文化財「湯舟坂2号墳出土 双龍環頭大刀」 (～9/30)
- 9.29 巡回展「発掘された京都の歴史2018」 (～10/14)
- 9.29 文化財講座④
「丹後地域と環頭大刀」
講師：(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター職員 菅博絵氏
- 10.7 文化財講座⑤
「発掘された京都の歴史2018」
講師：(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター職員 高野陽子氏
- 10.13 ぶらり丹後「宮津城」
- 10.27 特別展「天橋義塾と自由民権運動ー一人は人たるの本分を尽くすー」 (～12/9)
展示解説 10/28、11/25
- 10.27 文化財講座⑥
「古文書ドラマチックー古文書からみた自由民権運動ー」
講師：当館副主査 吉野健一
- 11.11 ぶらり丹後「府中」
- 11.17 文化財講座⑦
「丹後における自由民権運動の歴史的位置」
講師：大阪大学文学部教授 飯塚一幸氏
- 11.17 第28回紙すき教室 (11/18、11/24、11/25、12/1、12/8、12/11)
- 12.8 紙芝居講演 紙芝居「天橋義塾物語」
森山道子氏
講演「天橋義塾とその魅力」
講師：当館副主査 吉野健一
- 1.26 企画展「ふるさとミュージアムコレクション」 (～3/31)
堂本誠太郎製作の鍾馗像



古文書整理ボランティアの活動状況



丹後郷土資料館調査だより 第8号

発行 2019年(平成31年)3月26日

編集 京都府立丹後郷土資料館

〒629-2234 京都府宮津市字国分小字天王山611-1

TEL(0772)27-0230 FAX(0772)27-0020